

Global Classrooms



日本の国連加盟 60 周年記念事業

グローバル・クラスルーム 報告書

高校模擬国連国際大会への第 10 回日本代表団派遣支援事業



2016 年 6 月



グローバル・クラスルーム日本委員会

Japan Committee for Global Classrooms



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

【共催】

国際連合大学

【後援】

外務省

文部科学省

公益財団法人日本国際連合協会

国際連合広報センター

【協賛】

株式会社内田洋行



学校法人河合塾



株式会社公文教育研究会



株式会社講談社



学校法人駿河台学園



学校法人 高宮学園 代々木ゼミナール



株式会社エヌエフ回路設計ブロック



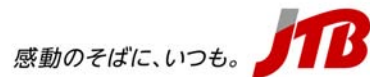
キックマン株式会社



TOEFL Junior® (GC&T)



株式会社ジェイティービー



損害保険ジャパン日本興亜株式会社

ちきゅうくらぶ

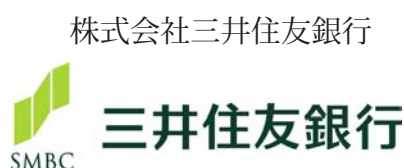


一般財団法人凸版印刷三幸会





海外トップ大進学塾 Route H
(ベネッセコーポレーション)



(五十音順)

【協力】

株式会社日本経済新聞社

株式会社読売新聞グループ本社



日本航空株式会社



株式会社リクルートマーケティング
パートナーズ



(五十音順)



全日本高校模擬国連大会は、留学促進キャンペーン
「トビタテ！留学 JAPAN」の趣旨に賛同します

目次

はじめに	2
グローバル・クラスルーム	3
日本模擬国連	3
企画概要	4
派遣報告	5
受賞	9
参加者報告（アドバイザー）	10
支援者・支援団体一覧	40
ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）からのメッセージ	41
グローバル・クラスルーム日本委員会（2016年6月現在）	42
おわりに	43
関連リンク	44



■ はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への10回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご支援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は2015年11月14日-15日に東京の国連大学で行われた第9回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた6校12名の高校生が、日本代表団として国際大会に参加するというものです。今回、日本代表団はクウェート国大使として世界27カ国、総勢約1500名の参加者を前に今大会においても見事な存在感を発揮していました。

派遣生は皆、自分の持っている力を最大限発揮しようと奮闘しておりました。12名それぞれが自分の弱みを、世界の広さを、そしてなによりも「世界との壁」を感じたことでしょう。国際大会が新たなスタートであることを肝に銘じ、各分野で羽ばたくことを心より願っております。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動の更なる普及と発展の一助になること、そして、これから国際舞台に関わろうとする多くの人の活力につながることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2016年度 理事長 齋藤優香子



■ グローバル・クラスルーム

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション(模擬国連)を通じて、現代世界における様々な課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する生徒は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。

グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。日本でも、大学生の模擬国連は30年以上の歴史があり、毎年全日本模擬国連大会が開催されています。そして2007年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきたメリルリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第1回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。

■ 日本模擬国連

日本模擬国連(Japan Model United Nations: JMUN)は、日本で初めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。1983年上智大学において、当時上智大学教授であった緒方貞子(元国連難民高等弁務官)顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている「模擬国連会議全米大会」への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模の拡大に伴い、日本国内における模擬国連の活動を本格化させ、2010年、名称を現在の「日本模擬国連」に改名しました。

日本模擬国連の目的は、「模擬国連」という活動を通じて、さまざまな国際問題についての理解を深めると共に、それらの問題の解決策を探り、国際社会に貢献できる人材を育成・輩出することです。また、国際政治や国際問題を体験的に学習する効果的な方法として「模擬国連」を日本において普及させる役割も担っています。



企画概要

【企画名称】

2016 年度高校模擬国連国際大会への日本代表
団派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会、
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
(ACCU)

【日程】

2016 年 5 月 11 日 (水) ~ 16 日 (月)

【開催場所】

米国ニューヨーク市

【内容】

米国国連協会の主催により開催される高校
模擬国連国際大会 (the 17th Annual Global
Classrooms International High School Model
UN Conference) に、グローバル・クラスルーム
日本委員会主催の第 9 回全日本高校模擬国
連大会 (Global Classrooms in Japan 2015)
にて選出された高校生が日本代表団として参
加することへの支援。同大会には米国国内の
22 都市を含む世界 27 か国から総勢約 1500
名の高校生が参加した。



1) 日本代表団 (12 名)

麻布高等学校

中本 憲利、西條 友貴

関西創価高等学校

上田 花菜、辻岡 美和

神戸女学院高等学部

高原 奈穂、藤井 あや

渋谷教育学園渋谷高等学校

鈴木 雅子、二木 恵

桐蔭学園中等教育学校

児玉 大河、田邊 雄斗

灘高等学校

灰田 悠希、牧野 越叢

2) 引率教員 (6 名)

北潟 大真 (麻布高等学校)

樋口 憲司 (関西創価高等学校)

水島 美和 (神戸女学院高等学部)

室崎 摂 (渋谷教育学園渋谷高等学校)

安井 健人 (桐蔭学園中等教育学校)

Aynsley Mark William (灘高等学校)

3) グローバル・クラスルーム日本委員会 (5 名)

評議員・派遣団団長 柿岡 俊一

(埼玉県立浦和西高等学校教諭)

理事 高橋 佑太 (東京大学 2 年)

理事 宇野 真一郎 (慶應義塾大学 2 年)

研究主任 神保 真宏 (東京大学 3 年)

研究 南 篤 (東京大学 2 年)

4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (1 名)

模擬国連推進部 高松 彩乃

派遣報告

【派遣日程】

- 4月17日(日) インフォメーション・セッション
 5月11日(水) 日本出発
 NY到着
 UNDP訪問
 5月12日(木) 国連クウェート政府代表部訪問
 国際大会開会式
 5月13日(金) 国際大会1日目
 5月14日(土) 国際大会2日目
 国際大会閉会式
 5月15日(日) NY出発
 5月16日(月) 日本帰国



【参加会議】

学校名	参加者氏名	担当会議	議題
麻布高等学校	中本 憲利 西條 友貴	World Bank (WB)	Achieving 2030 poverty reduction goals
関西創価高等学校	辻岡 美和 上田 花菜	Social, Humanitarian and Cultural Committee (GA3 SOCHUM)	The protection of journalists and humanitarian workers in conflict zones
神戸女学院高等学部	高原 奈穂 藤井 あや	The Legal Committee (GA6)	The question of digital and cyber surveillance on civilians
渋谷教育学園渋谷高等学校	鈴木 雅子 二木 恵	Economic and Social Council (ECOSOC)	Sustainable urbanization and socio-economic integration
桐蔭学園中等教育学校	児玉 大河 田邊 雄斗	Food and Agricultural Organization (FAO)	Increasing agricultural productivity : feeding 9 billion
灘高等学校	灰田 悠希 牧野 越叢	United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO)	The re-establishment of education systems in post-conflict regions

April 17

【インフォメーション・セッション】

日本出版会館の会議室にて、渡米前の説明会及び政策発表会を行いました。評議員による激励の言葉を受け、派遣生達は国際大会が目前まで迫っていることを改めて認識し、決意を新たにしました。

政策発表会では、担当国であるクウェートの大使として、担当会議ごとに設定された議題について自分達の政策を英語で発表しました。派遣生達は、外務省よりお越し頂いた、地球規模課題総括課の伊藤様、経済安全保障課の熊谷様、国際文化協力室の中山様からのフィードバックや派遣生間での質疑応答を通じて担当会議・議題についての理解を深めました。また全日本大会では二つの議場に分かれていたため、一部の派遣生同士は今回が初の顔合わせとなりましたが、午後から行われた英語でのグループディスカッションを通して徐々に打ち解けていきました。

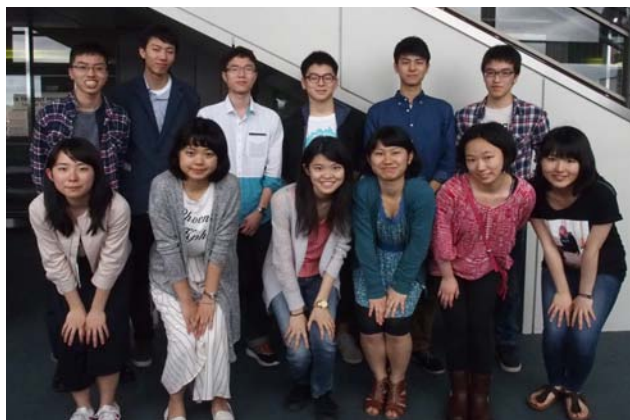
今年度も過去の国際大会派遣生が多く集まり、派遣生達は様々なアドバイスを受けるなどして有意義な時間を過ごしました。



May 11

【日本出発・NY到着】

成田国際空港からジョン・F・ケネディ空港へと出発しました。インフォメーション・セッションの時とは打って変わり、派遣生達は皆リラックスした様子でした。



【UNDP 訪問】

中満泉国連事務次長補及び開発計画総裁補兼危機対応局局長を訪問しました。中満氏からはご自身の取り組みのお話のほか模擬国連会議に向けた激励のお言葉を頂きました。国連職員の現場の声を伺うことができ、派遣生達は大きな刺激を受けていました。



May 12

【国連クウェート政府代表部訪問】

国連クウェート政府代表部を訪問しました。三等書記官からは、主に中東におけるクウェートと国連の取り組みについてお話しいただき、派遣生達はそれぞれの担当の議題と関連付けた質問を熱心に行っていました。大使館での歓待を受け、派遣生達は翌日からの会議に向けて気持ちを高めていました。



【国連日本政府代表部訪問】

国連日本政府代表部を訪問しました。参事官の間瀬博幸様からは日本の国連外交というテーマで国連が担う役割についてお話しいただき、派遣生達は日本の国際社会における立場や外交交渉に関する様々な質問を投げかけていました。



【高校模擬国連国際大会 開会式】

国連本部総会本会議場で開会式が行われました。世界各国から大勢の高校生が一堂に会するため、派遣生達も緊張しているようでしたが、式の開始までは、積極的に世界の高校生達と交渉を始める等、早くも大使として動き始めていました。やがて式が始まると派遣生達は気を引き締め直していたようでした。



May 13-14

【高校模擬国連国際大会 会議1日目】

模擬国連会議が Grand Hyatt Hotel にて行われました。派遣生によって参加する会議や扱う議題も様々でしたが、どのチームも真剣に他国大使と交渉し、自国の国益達成を目指しました。



【高校模擬国連国際大会 会議 2 日目】

初日の会議行動が思うようにいった派遣生もいかなかった派遣生も直前まで会議戦略を練り直した上で、2日目の会議に臨みました。どの派遣生も自分が設定した目標に向かって最後まで諦めずに交渉を続けました。



【高校模擬国連国際大会 閉会式】

会議終了後、閉会式が開会式同様に国連本部総会本会議場にて行われました。今派遣では麻布高等学校が優秀賞 (Honorable Mention Award) を受賞しました。二日間の会議を終えた派遣生達は達成感に満ち溢れた表情をしていました。



May 15-16

【NY 出発・日本帰国】

ニューヨークでの5日間はあっという間に過ぎ去り、15日にジョン・F・ケネディ国際空港を出発し、16日に帰国しました。異国の地で見事会議を乗り切った派遣生達は渡米前に比べて何倍も逞しくなったように思われます。



■ 受賞

本年度、日本代表団は 1 校が賞を受賞しました。
World Bank で "Achieving 2030 poverty reduction goals" という議題に取り組んだ麻布高等学校が優秀賞 (Honorable Mention Award) に輝きました。

【優秀賞 (Honorable Mention Award)】

麻布高等学校



宇野 真一郎

慶應義塾大学法学部2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

参加者報告 (アドバイザー)

はじめに、今年度の高校模擬国連国際大会への日本代表団派遣支援事業にご協賛・ご後援いただきました諸団体の皆様、並びにグローバル・クラスルーム日本委員会の活動を日頃よりご支援下さっている全ての方々に御礼申し上げ、無事に派遣事業が終了したことをご報告いたします。

今回の派遣事業で私は理事として、同じく理事を務める高橋、研究主任の神保、研究の南と共に日本代表団を引率いたしました。以下では主に国際大会での派遣生の様子と、派遣生を見ていて私が抱いた感想を述べ、私からの渡米報告とさせていただきます。

私は第7回の全日本大会に出場し、国際大会への切符を手にするができなかったのにも関わらず、理事として当事業に携わらせていただきました。そのため私自身国際大会を生で見るのが初めてであり、新鮮だったというのが率直な感想です。国際大会と全日本大会との最大の違いは、やはり会議を全て英語で行わなければならないことです。派遣生の中には海外に出るのでさえ初めてだという子もおり、会議初日は自分の意思がなかなか相手に伝わらず悔しい思いをしている派遣生や、現地学生の話術の巧みさに圧倒されたという派遣生が多かったように思います。しかし派遣生たちは二日目の会議終了まで気持ちを切らすことなく、また言語面でのディスアドバンテージをものともせず、ジェスチャーや画用紙を用いるなどして必死に相手と議論・交渉しておりました。

次に、会議そのものの進み方というものも全日本大会との大きな違いの一つだと思います。全日本大会では会議の序盤から Unmoderated

Caucus（非着席討議：アンモデ、UC）が多く採択され、Moderated Caucus（着席討議：モデ、MC）やスピーチよりも重視されます。その一方で、国際大会では序盤はMCとスピーチ中心で会議が進み、後半のセッションにならないとUCが採択されません。派遣生も全日本大会とは異なる進み方に会議初日は困惑しているようでした。しかし派遣生は会議初日の午後には国際大会特有の流れにきちんと適応しており、昼食の時間を惜しみながら会議後半のUCに向けて準備する派遣生や、気持ちを切り替えてせっかくの国際大会を最後まで全力で楽しもうとしている派遣生がいたのは大変印象的でした。

今回の派遣事業を通して派遣生は多くのことを学んだのではないかと思います。事前準備での綿密なリサーチを経て議題に関する知識や担当国クウェートに関する知識が深まったことはもちろん、英語での交渉の難しさや思い通りにことが運ばないもどかしさなど実際の会議に出て学んだことは個々人によって様々でしょう。そうした実際に経験してみた人にしかわからない、学校の授業や教科書では到底学習することのできないことを、派遣生の皆さんには自分の中だけに留めておくのではなく、是非高校の部活の後輩や全日本大会で一緒に戦った仲間伝えてほしいと思います。また、派遣生自身が今回の国際大会で得た経験を今後の人生のステージの糧として生かしてくれることを願ってやみません。

さて、グローバル・クラスルーム日本委員会が運営する11月の全日本高校模擬国連は今年度で節目となる10回目の大会を迎えます。3年前まで参加者側だった私が、このような節目の時期に運営側の理事として模擬国連に関わることが出来る機会をいただいたことを大変嬉しく思うと同時に、身の引き締まる思いです。今後とも高校模擬国連の更なる普及・発展に全力を尽くしていく所存です。

最後に、繰り返しになりますが今回の派遣事業をご支援下さった方々に心より御礼申し上げます。また、今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へ変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

高橋 佑太

東京大学教養学部 2 年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

はじめに、高校模擬国連国際大会への日本代表団派遣事業にご協賛・ご後援いただきました諸団体の皆様、並びに日頃よりグローバル・クラスルーム日本委員会の活動をご支援くださっているすべての皆様に厚く御礼を申し上げます。今年でグローバル・クラスルーム日本委員会は 10 周年をむかえ、派遣事業も今期で第 10 期となりました。高校生にさらなる模擬国連の魅力を伝えられるように邁進してまいります。

今回の高校模擬国連国際大会では、麻布高等学校が優秀賞に当たる Honorable Mention を受賞しましたことをはじめにご報告させていただきます。

以下では、国際大会における派遣生の様子とともに、今回の派遣事業を通じて感じた国際大会の魅力述べ、私からの報告とさせていただきます。

日本の会議で活躍してきた派遣生にとって、国際大会は驚きや戸惑いの連続だったと思います。日本で必死に準備を重ねながらも、思うように行動できない、主張できない環境は、辛かったものと思います。「こんなはずじゃなかった。」ある派遣生のそんな一言が強く印象に残っています。しかし、思うようにいかない理由を周りの環境のせいにしてしまっただけでは、そこで前進が終わってしまいます。思い通りにいかない中で、どうしたら自分が輝けるのか、楽しいのかを見出して、行動に移す。そうして初めて、何かを得ることができるのではないのでしょうか。心強くも派遣生は皆そのことに気づき、午前中よりも午後、1 日目よりも 2 日目と自分のできること、自分のやりたいことを見つけて、行動に移

していました。その結果がたとえ満足のいくものでなかったとしても、そうした経験が派遣生の糧となることを確信しています。

また、派遣生は日本の大会と国際大会との違いに戸惑うと同時に、どちらの大会でも輝く大使は同じなのだということに気づいてもしました。日本であれアメリカであれ、議事の進行や価値観は異なるろうとも、他者から認められ、尊敬される人というのは世界中で大きく変わるものではないのだと実感したようです。このことは大変大きな発見だったのではないのでしょうか。言葉も文化も異なる人であっても、その最も大切な部分は世界で共通だということ。そのことに気づくことが、他者を理解し、認め合うことへの大きな一歩となると思っております。

文化的背景を同じくする日本人と議論をしていると、どうしても無意識に両者に共有された暗黙の了解が存在します。しかし国際大会ではその暗黙の了解が存在しません。価値観、考え方の異なる人と議論をしなければならない。その壁にどう立ち向かうかがこの国際大会の醍醐味の一つだと思っています。日本で培ってきたものが、世界の場では思うように発揮できないこと、と同時に日本で培ってきたものが、世界でも通じるのだという発見。この発見が派遣生の今後の活動の弾みとなることを期待しています。

派遣生につきましては、この派遣事業をゴールとせず、この派遣事業で得たもの、感じたものを糧として、今後活かしてほしいと思います。この派遣事業を、将来派遣生が大きな意味を持つ事業であったとふりかえる日が来ることを願っています。

最後に、高校生を引率する身として、また派遣団の OB として、高校生の持つ力と可能性の大きさに魅了されたと同時に、この模擬国連活動の魅力が改めて感じました。国際問題の解決に向けて本気で取り組む熱意のもった高校生が大

きな成長を得られるような経験を提供できるように、模擬国連事業をさらに魅力的なものできるように、理事として邁進していく所存です。

繰り返しになりますが、今回の派遣事業をご支援くださいました皆様に心より御礼申し上げます。

神保 真宏

東京大学経済部 3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究主任

今回は、節目となる第10回目の高校模擬国連国際大会への日本代表団派遣事業でございました。10年目を迎え、本委員会が114人もの高校生を国際大会に派遣できたのも、ひとえに日頃より本委員会の活動にご賛同・ご支援・ご協力いただいている皆様のおかげでございます。心より御礼申し上げます。

さて、早速今年度の事業を振り返らせていただこうと思います。今回は私にとって2度目の引率でして、前年と同様に派遣生が会議において最大限力を発揮できるようにサポートいたしました。私は、準備期間から会議本番まで、常に一番近くで派遣生の取り組みを見ることの出来る立場にありました。書籍、インターネットなどを駆使した綿密なリサーチを行い、例年通り議場で最も豊富な知識を持っているのが派遣生たちであったことは間違いないと自信を持って断言できます。

ただ、日本の模擬国連と国際大会は風土が異なりますため、派遣生が戸惑ったり、臆してしまったりする場面を幾度と無く今年も見ることになりました。どの派遣生も会議途中の休憩にはぐったりしている様子でした。私が驚いたのはそこでの「諦めない精神力」です。彼・彼女らには事前準備の段階で、口うるさく「この派遣事業を実りあるものにするには、自分としっかりと向き合い、達成したいことを明確化し、それに向かって邁進することが大切だ」と伝えてきました。多くの派遣生は原点回帰に成功し、周りの状況を冷静に判断し、主体性を持って周りを巻き込めていたように思います。

この派遣事業は、現時点でも派遣生に大きな影響を与えているのでしょうか。また、派遣生にとって高校模擬国連生活における「集大成」であり、彼・彼女らなりに満足感・後悔などを抱えていることでしょうか。それは後ろの頁にございます派遣生の報告をご覧いただければ感じていただけると思います。しかしながら、この派遣事業の真価は10年、20年という長い期間を経て発揮されるものと私は確信しております。また、派遣生が感じている現在の心持が彼・彼女らの人生における糧になることと信じております。第10期派遣生が、10年後、20年後、どういった場で、どのような活躍をしているのか、楽しみでなりません。

現在、日本での模擬国連活動は高校、大学を中心に拡大を続けています。また、今年は日本の国連加盟60周年ということで特に注目を浴びる機会も多いように感じます。(ちなみに本事業は外務省による日本の国連加盟60周年記念事業の認定を受けております。)これを好機にますます模擬国連活動が活発になるよう、そして一人でも多くの高校生に触れてもらえるように尽力してまいります。

最後に繰り返しになりますが、今回の派遣事業を支えて下さった方々に、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として厚く御礼を申し上げ、報告を終わらせていただきます。

南 篤

東京大学教養学部2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究

はじめに、今回の高校模擬国連国際大会への派遣事業にご支援、ご協力いただいたすべての皆様に深く御礼申し上げます。私は派遣生の模擬国連会議のサポートの役割として、今回の渡米に同行いたしました。

昨年11月に開かれた全日本大会で優秀な成績を収め、国際大会への出場権を手に入れた派遣生12名は、この国際大会が高校模擬国連の「終わり」となりました。ここに至る道のりは様々だったのですが、派遣生は皆それぞれの思いを持って「終わり」に立ち向かおうとしていました。

物事に情熱を注ぎ、本気で取り組む。なかなか、容易にできることではありません。ただ、スポーツや音楽、どのジャンルであれ、本気で取り組んでいる人は輝いていると私は思います。そして派遣生にとっては「模擬国連」だったのでしょ。国際大会という、言語や文化、価値観やルールさえ異なる場で、困難に直面しながらも必死で戦い、自分たちにできることを探し、自分たちの痕跡を残そうとする派遣生は、私には輝いて見えました。

「有終の美」という言葉があります。どの派遣生も、期間に差はあれ模擬国連に対して情熱を注いできた、その集大成としての国際大会は、納得のいく「終わり」だったのか、私なりに考えていました。派遣生の「生の声」は、彼ら自身の報告をご覧いただければと思いますが、私から見た彼らのほとんどの顔は、満足そうではありませんでした。実際、悔しさを口にする派遣生が多くいました。

物事には必ず「終わり」が存在します。それを満足のいく形で終わらせることができるのは、

ほんの一握りです。ほとんどの人は、涙をのんで「終わり」を迎えることになります。全日本大会に出場できずに涙をのんだり、全日本大会で不本意な結果に終わったりする高校生がほとんどの中で、彼らは「ほんの一握り」になるチャンスを残した人々でした。

確かに「有終の美」を飾ることは、物事に本気で打ち込んできた人々にとっては理想であると思います。しかし、満足のできない「終わり」という、どうしようもない結果を突き付けられるという経験は、次のステージで活躍できる糧になると確信しています。もしかすると、派遣生にとっては不本意な「終わり」を迎えるというのはこれまでそう多くなかったかもしれません。しかし、会議を苦しみながら戦い抜き、それでも悔しさを味わったことは大きな経験として彼らを成長させてくれると思います。

この「終わり」こそ、派遣生にとっては新たなスタートラインに立った状態です。閉会式で鳴らされた木槌の音は派遣生の高校模擬国連の「終わり」であると同時に、次のステージの「始まり」の合図として、派遣生を奮い立たせてくれたと思います。派遣生それぞれが新たなステージで、どのような活躍をしてくれるのか、私共も楽しみにしております。

また、私は来年度も派遣事業に同行させていただく予定であります。国際大会への出場を目指す高校生には、ぜひこのチャンスを掴んでいただきたいと思います。もちろん、そこに至る過程は容易なものではありません。しかし、準備から当日の会議までの中で、議題や国を深く知ったり、自分やパートナーと向き合ったり、世界の様々な高校生と交流したり、得られるものはたくさんあります。また、国際大会を目標に立てて努力する過程にも、成長する機会があります。目標にする価値は十分にあると保障いたしますので、ぜひ目指してください。

最後に、派遣事業は今回で10回目を迎えることができました。繰り返しになりますが、これまでご支援、ご協力していただいた皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも本事業を継続的に実施できますよう、引き続き皆様のご協力をお願い申し上げます。また、私もこれまで派遣事業で蓄積された経験を来年度のサポートへ生かせるよう、さらに努力を積み重ねて参ります。

参加者報告（派遣生）

中本 憲利

麻布高等学校 2 年

はじめに

模擬国連に出逢って四年、追い掛け続けた一年。きっかけは、大先輩の寄稿文を拝読したことでした。そこには、全日本大会を勝ち抜き、国際大会でも存在感を放って、賞を勝ち獲ってきた偉大な先達の姿がありました。中学一年生の春、僕は席の一つ離れたクラスメイトと、いつか必ずこれを目指そう、と約束したのです。……月日は流れて、高校一年生の五月。僕たちのペアは静かに結成されました。短期決戦、藻掻き足掻いた末、無事に第 10 回日本代表団の一員として国際大会に派遣されることと相成ったのです。

先輩方の遠い背中を追い続けて、やっと今の場所にたどり着きました。費やした一年の結果として国際大会で優秀賞を頂くことができたのは、これ以上ない喜びです。ただ、正直に申せば、一年間、つねに思考の中心にあったものが終わってしまったことへの、虚脱感や喪失感も大きく、僕の心中にごった返す感情は、容易に言語化できそうにありません。本報告書は、そういった感覚の只中にある僕が、自ら感じたことを拙いながら記したものとご諒解いただければ幸いです。

会議について

僕たちの議場は World Bank（世界銀行）で、議題は Achieving 2030 poverty reduction goals（2030 年までの貧困撲滅の目標を達成するには）というものでした。僕たちは中東の産油国、クウェートの外交官として議論に臨むことになりました。

担当会議が決まって、僕たちは、会議の「流れ」についてかなり綿密な予測を立てました。まず、メインテーマが「貧困」とだけあって、明白な対立軸が形成されるとは考えにくい。ならば、

教育や社会的弱者、基金設立、データベース、農業などの分野について網羅的な議論が為される中で、どちらかと言えば細かな政策について小規模な衝突が起こるのではないかと考えたのです。この見立ては、ほとんどの中し、かなり多くの国が似通った政策を持ち寄っていたことから、比較的スムーズに交渉を運ぶことができたように思います。

僕たちが議場に持ち込んだ政策は、

1. 貧困に関するデータベースの再構築
2. 正当な権利を有する国籍保有者への包括的な支援の拡充
3. 先進各国主導による貧困撲滅のための資金援助の促進

の三つのみです。難解で独自色の強すぎる政策を主張すれば、最悪の場合、議場で孤立してしまう可能性も危惧されたため、このように極端な簡略化を行いました。また、これらを貫く大きな柱として、「貧困の負の連鎖を断ち切ることによって、貧困撲滅を持続可能な開発の一步とする」という概念を盛り込み、ニューヨークに向かいました。

また、会議中は、基本的に僕がスピーチや Moderated Caucus（着席討議：モデ、MC）、コンバイン（他のグループとの意見統合）交渉などの外交を行い、相方の西條がグループ内政の掌握を行いながら、相互補完的に役割を埋めていく、という方針を採りました。

どうすればグループのイニシアチブが取れるのか。どうすれば決議案の執筆者になれるのか。どうすれば外交において他グループに負けない交渉ができるのか。僕たちは、結果から逆算した戦略を立て、他国の関心を引くよう行動することを常に心がけました。

問い

少し趣向を変えて、一つの「問い」について記していきたいと思います。

——「模擬国連」に意味はあるのか。

「模擬国連」は、あくまでも、「模擬」であり、「Model」に過ぎません。行われた討議が国際政治に反映されることもなければ、採択された決議案が実際の国際社会に影響を与えることもない。だからと言って、模擬国連に携わることに意味はないと断じてしまっていいわけではありません。その理由——というより私見を述べて、本報告書を結びたいと思います。

僕は、幼い頃から人と議論することが大好きでした。舌戦を繰り広げていると、妙に頭が研ぎ澄まされてくる感覚がありました。

しかし、模擬国連に関わり続けたこの一年で、僕はその「感覚」の正体に辿りついたように思います。僕が本当に好きなのは、議論という過程において何かを創出する行為だったのです。僕は、スピーチ中にマイクスタンドの前から、数百の瞳の輝きを目にしました。議長裁量の決定に反駁する参加者と、フロント（会議監督・議長などの会議のマネジメントを担当する集団）との緊迫した応酬に、息を呑みました。

Unmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ、UC）の最中に交わした闊達な議論の最中、僕は夢のような昂揚感を味わっていました。会議をずっと見て下さっていた大学生の方は、僕たちがまるで水を得た魚のようであったと仰っていました。まさしく、そういった感覚を味わっていたのです。決議案の提出が成功したときには、他国の大使と快哉を叫び、決議案が否決されたときには慰め合う。そういった全ての行動に、僕は余りある幸せを覚えていました。

たとえば、会議の結果が、「自らのグループの決議案否決」というものだったとしても、議場で築かれた信頼はひとつの財産たり得るでしょう。フロントとの交渉で培われた度胸は、いつかどこかで、再び僕を助ける糧となることでしょう。公式発言と、モデにおいて、大勢の前で自国の、そして自らのグループの政策を訴えかけた経験は、揺るぎない自信を僕に与えてくれました。

種々の場面で、「模擬国連」は僕に気付きを与える触媒となってくれていたように思います。僕は、物事をラディカルに捉えつつも、一度は全てを受け入れてみる、という姿勢を体得できました。模擬国連には意味があるのです。そして、僕は、自身がこの経験を後輩に、社会に、還元する使命を負っていると強く思っています。望むらくは、後に続く誰かが、共にその使命を負わんことを。

最後に、グローバルクラスルーム日本委員会の理事・研究の方々、ACCUの皆さま、麻布高等学校の先生方、先輩方、そして両親に限りない感謝の気持ちを捧げます。

最後に、私が模擬国連に参加するにあたって支えてくれた先生方、友達、家族、そしてパートナーや派遣団の仲間たち、グローバル・クラスルーム日本委員会の方々、すべての方に感謝し、お礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



西條 友貴

麻布高等学校 2年

“For the Honorable Mention, Kuwait.”と優秀賞を受賞したときの達成感。大会1週間前にBG(議題概説書)が大幅変更されて、リサーチ量が足りないことに対する焦燥感。会議の開始と同時に始まった各国大使による猛烈な政策アピールに押し潰されそうになったときの緊迫感。インド人・パレスチナ人・ロシア人・アメリカ人・ドイツ人・中国人など世界中から集まった高校生とハイレベルな議論をしたときの高揚感。Draft Resolution(成果文書案:DR)提出期限の1分前にも関わらず、政策が書かれた紙が紛失したときの絶望感。提出したDRが否決された時の悲壮感。目をつぶると、これらの感情が情景とともに鮮明に蘇ってくる。そして大会を終えて帰国した今、虚脱感に襲われる。この報告書を書くにあたって、常に頭の隅にあった模擬国連が終わってしまったという空虚感に幾度となく襲われ、集中できず、正直、この報告書の執筆を投げ出しそうになった。そうはいっても書かないわけにはいかないため、僕の模擬国連との出会いからニューヨーク派遣までの流れについて少し振り返ってみる。

僕が模擬国連に初めて出会ったのは中学1年生のときである。世界大会で優秀賞を取った先輩の寄稿文を読み、高校生が、会議で担当する自国の現状だけではなく、他国の事情まで調べて、一国の大使として政策を売り込み、グループを形成して、英語で政策文書をまとめ上げていく活動がそこで行われている大会(世界)があるということを知り、ただただ圧倒されたことを今でも覚えている。ちょうど、同じクラスで席も近かった相方の中本と、漠然とした「面白そう」という感情を共有して、高校生になったら参加することを決心した。(文章にすると綺麗に聞こえるが当時はただ「頑張ろう」「おー！」みたい

なノリだったと思う)そして、あれから約4年後、高校生になり、模擬国連に挑戦することを再確認し、悪戦苦闘しながらも1次選考を通過して高校模擬国連全日本大会に参加することになった。全日では、他校の大使の圧倒的なリサーチ量に圧倒されながらも、自分が内政を管理して、中本が外交を担当するといった、お互いに役割を決めて、持ち前の困難に冷静に対応する力を駆使して交渉・議論をした結果、優秀賞を獲得することが出来た。そして、ニューヨーク派遣が決まり、地道に英語を喋り議論する練習を積み、政策を綿密に理論構成して、会議作戦を考えて臨んだ。ざっと説明すると上記のような感じである。

「模擬国連とは自分にとって何なのか？」この4年間、模擬国連に関わる機会がある都度、自問自答していた気がする。そして、この疑問への回答、すなわち僕の模擬国連に対する思いは、どんどん形になっていった。

「模擬国連とは、ニューヨークまで無償で行かせてくれる有り難い機会」というのは言うまでもないが(笑)、1つ目は、「模擬国連は井の中の蛙を実感させられた大会である。」ということ。Indian English や Mexican English を初めて生で聞き、戸惑いながらもなんとなく感動(?)を覚えたが、なんといっても、世界のハイレベルな高校生と一緒に議論することが出来て様々なことを勉強させてもらった。それと同時に、将来一緒に働くかもしれない世界の同年代のレベルの高さに、実際、危機感も覚えた。ここで、最も衝撃を受けたロシア大使のことについて紹介したいと思う。彼らは、特に交渉を得意としていて、交渉においては彼らの右に出るものはいないと言っても過言ではない程のスキルを持っていた。僕たちが属しているブロックのリーダーを務めており、議長が「5分でコンバイン(他のグループとの意見の統合)をしろ」という無理難題を突き付けたにもかかわらず、これを

いとも簡単に(?)成し遂げた国である。彼らに学んだ最も重要なことは、「交渉において最も重要なことは誠実な態度を示すこと。」ということ。交渉において、相手を言い負かすことはあまり重要ではない。逆に、相手の政策を批判して、自己の政策を主張しすぎると、みんなに反感を買われることが多い。重要なのは、みんなの一つのものを作っていけるように、みんなの話を聞き、統合していくことである。国際問題は、一国が主張するのではなく、すべての国が協調することで解決していくものである。彼らが、交渉においても、内政を管理するときも、相手の大使の話をしっかり聞き、みんなで政策を作り上げている様子を見て、その重要性を痛感させられた。

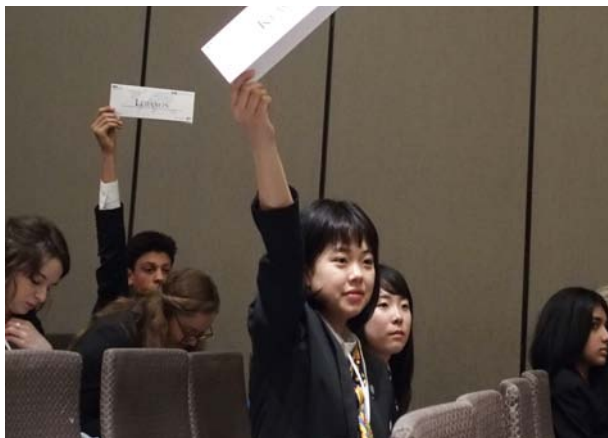
そして、2つ目は、「模擬国連とは、自分の将来を切り拓く強力な助人(的存在)である。」ということ。模擬国連においては、国際問題に面と向かって取り組み、これを解決するために様々な情報を獲得して、意欲的な同世代の高校生と議論を戦わせる。これらを通じて、自分を見つめなおすとともに、会場では対戦相手ではあったが、お互いに能力を認めあえた素晴らしい仲間たち、そして、尊敬してやまない先輩や大人の方々会い、自発的・積極的に行動して、自分が将来何をやりたいのか考えるきっかけになったと思う。模擬国連は会議で完結するわけではない。会議と同様にこのような機会や気付



きを得たことに重要な付加価値があると感じている。

ここまで、長々と僕の思う模擬国連について述べてきたわけだが、簡単に言うと、「模擬国連は最高の舞台だ」、この一言に尽きると思う。模擬国連を始めたきっかけ、模擬国連を通じて得たもの、会議を経験して感じることや学ぶことも人それぞれである。しかし、1つみんなに共通することは、「模擬国連は成長する場を与えてくれる」ということ。後輩たちにも是非、このような体験をしてほしいと思う。

最後になるが、今回の派遣は、本当に多くの皆様に支えていただいた。会議及び渡米のサポートをしてくださったグローバルクラスルーム日本委員会の皆様、渡米中に引率してくださった柿岡先生と高松さん、リサーチにあたって助言をくださった学校の先生方、模擬国連を始めるきっかけになり、また多大なアドバイスをくださった先輩方、そして今回の派遣で一緒になれた10期派遣団のみんなに、この場をお借りして感謝を申し上げたい。本当に、ありがとうございました。



上田 花菜

関西創価高等学校 3年

かつて無知のくせに生意気だった中学生の私は、設立から70年たってもいまだ紛争が続き、平和とは言えない世界を統括する国連を批判的に考えていました。高校に入学し、たまたま模擬国連部があることを知り、もっとちゃんと学んでから自分の意見を持とうと思い立ち、ただ国連という2文字が入っているからという単純な理由で入部しました。相当大胆な動機ですが、その決断は間違っていなかった、むしろ私の人生を大きく変える決断になったと、今なら断言できます。模擬国とはなんぞやから始まり、一年の秋、先輩が学校として始めて全日に出場したことをきっかけに、私も出てみたいと思いました。そこからペアと出会い、準備していくうちに、夢のまた夢だった入賞がいつしか2人の目標となり、今でも信じられないほどですが現実のものとなりました。全日ではグループのリーダーをしたのではなく、大使と大使とを繋ぎ、自国益と他国益の両立をしたことを評価して頂きました。しかしよく考えると、それは会議の殆どが日本語だったからこそ、互いの納得がいくまで交渉できたものの、NYでの国際大会は全てが英語。模擬国を始めて純ジャパ（純粋な日本人）という言葉を知った、帰国子女でもなく学校の英語の授業程度の英語力しかなかった私にとって、それは一番の敵であり、最終的に見ても一番苦しめられたものとなりました。

それをカバーするためにも、せめてリサーチと諸準備は万全で出発したいと発起し、ペアとたくさんアイデアを出し合い、他国の大使に覚えてもらえるよう、自分たちの政策に名前を付けました。その名は“Three”。三つの段階をそれぞれreから始まる単語でプロセス化し、Threeの真ん中のreと掛け合わせました。それらを可愛

い和柄の折り紙に印刷して、さらに言えばロゴまで作り、気合い満々で準備を進めました。休日にはペアと二人で、会議で使ったら注目を集められそうな、日本の技術ならではのグッズを買いに行ったりもして、「やるからには入賞したいね」とも話すようになりました。

緊張感はもちろんありましたが、会議が近づくにつれどんどん楽しみにになり、迎えた会議一日目。何といても同世代なのに一回り大人びて見える他国の大使に圧倒されつつも、近くの席の大使と仲良くなれてほっとしたのも束の間、いきなり困難に直面しました。私たちの議場の議題は「人道支援者及びジャーナリストの紛争地での保護」。これまでISなどの非国家主体の過激化の収束、誤爆の排斥、人道支援者やジャーナリストの社会的価値のさらなる認識をよびかける、などといったような Draft Resolution（成果文書案：DR）を中心に考えてきた私たちとは違い、殆どの国が、紛争地での活動を目的に出国する彼らをどうセキュリティしていくのかなどの方向から議論を進め始めました。さあどうしよう？ここからどう流れを作っていこう？一気に頭の中で混乱という混乱を超える回転が始まりました。とりあえず私たちの政策をみんなに知ってもらいたいと思い、アンモデで相手の大使の政策を聞きつつ、印刷した折り紙を渡して説明しました。たいていの大使は「いい政策だね、おもしろいじゃん！」と言ってくれたのですが、一部の大使からはあまりいいリアクションを得ることができず、「どういう風に直したら受け入れてもらえる？」と聞いたらすごく速いスピードで意見を言われ、正直に言って聞き取ることができず、こうして自分たちの政策に対して意見を言ってくれたのに、日本語だったとしたら確実に重要な外交ができた場面だったのに、うまく返せなかったことが悔しかったです。かと言ってここであきらめたくないと言え、外交を続け、

あるグループに入りました。そこで各国大使の意見や政策を整理するために、日本から持ってきた静電気でどこにでも張れるホワイトボードを使ってみることにしました。「めっちゃおもしろいじゃん！」「日本すごい！」と狙い通り興味を集めることができたのも束の間、グループのリーダー格の大使が「ほかのグループにDRとか見られたらいやだからいったん剥がそう」と衝撃的な言葉を放ちました。“えっ、なんでなんで??最終的に知ってもらわなきゃいけないんだから別に良くない?”この疑問は二日目に明らかになりました。灰色のような一日目を終えた私たちは、一旦賞のことは忘れて、この最高の舞台を精一杯楽しもうと話しました。全日でも、前半戦は苦しい状況が続いても後半戦は楽しめたり、自分たちの持ち味を出せてきたことが私たちの自信でもあり、ある意味で強みでした。だからこそ、二日目に対しての期待は大きかったし、議場でスピーチできるチャンスがあれば、非国家主体のことについても呼びかけてみようと思っていました。

会議2日目。元々人数の少ないグループだった私たちは他のグループとコンバインする流れとなりました。そしてここで一日目の疑問の答えがでました。コンバインするという行為の重みが日本の大会とは全くもって違ったのです。恐らく軽いスタンス確認だけで細かいDRは見えないのでしょうか。一個一個の条文に対して綿密に言い回しや単語の選び方まで、慎重に吟味してきた私たちにとって、これはカルチャーショックと言うべきなのか、取りあえず驚きでした。相手方のグループの子とどう議論を交わせばいいのか分からなくなって脱力しかけたとき、議場を見に来ておられる理事研究の方が見えました。今の状況を話したとき、「絶対疑問を感じている大使もいる。あきらめなくて、そこで提案していくんだよ。」と。まだ負けたくない。何の爪痕も残さないままNYを発ちたくない。その一

心で対一の外交に回りました。十人十色の反応でしたが、それでもせめて自国のDR、ブロックのスタンスだけは、必死に説明しました。そして迎えた投票。配られたDRにはスポンサー(提案国)としてKuwait。しかし、私たちの持ってきたDRはそこにはありませんでした。ただただショックでした。しかしそこでその事実を冷静に受け止めている自分もいました。議場でフレキシブルになれなかったこと。うまく100%の思いが伝えられなかったこと。そのとき初日にお話を伺ったUNDPの中満さんのお言葉を思い出しました。中満さん自身、昔、英語は伝わればいいと思っておられたらしいのですが、たくさん経験を積み、リーダーとして人を動かしておられるいま、交渉をする際には特に細かいニュアンスを表現する英語力が大切であると断言されていました。まさにそのお言葉通りだと、身をもって感じた会議二日間でした。

ここまでかなり苦闘の様子ばかり書いてしまったのですが、同じグループの大使と一緒にできて良かったと言ってもらえたこと。沢山の友達を作ることができ、沢山の発見と価値観の広がりをもたらしたこと。全日が終わってから6か月間、膨大なリサーチと準備を最高のペアとできたこと。尊敬する10期派遣団のみんなと出会えたこと。ここまでたくさんの方々に支えていただいたこと。会議で抱いた悔しさも歯がゆさも。全てに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

この貴重な経験をさせて頂いたことに恩返しする方法は、一つだけ。派遣で学んだたくさんの方々のことを糧にこれからどういう風に真価を磨き成長し続けられるかだと思っています。

辻岡 美和

関西創価高等学校3年

「平和とは希望して訪れるものではなく、戦略的に深く画策し、猛烈な外交によって構築し、知識と情報の極限において守るものであり、そのような戦略的平和志向に導かれた継ぎ目のない連続的努力によってのみ、かろうじて確保されるものである。」

これは猪口邦子元軍縮会議日本政府代表部特命全権大使の著書『戦略的平和思考』からの抜粋です。ただ漠然と世界平和に貢献したいと言い続けてきた私ですが、高校生になり、この言葉に触れてやっと平和とはどのような状態を指すのか、誰が何をすればその状態に近づくのかというようなことを本気で考えるようになりました。そして抜粋にある「連続的努力」はどのようにして行われるのかを知りたいと思い、出会ったのが模擬国連でした。それから1年後、優しくて面白いペアと、全日本大会を経て国際大会に出場できるとは夢にも思っていませんでした。模擬国連の存在すら知らないまま大人になっていたかもしれない私をこの道に導いてくださった方々に感謝しつつ、大会を振り返りたいと思います。

さて、いかに自分たちの政策を分かり易く伝えられるかが大切だと聞かされていた私たちは、全日本大会の時と比べ、リサーチの量は少なめに、その分政策に名前を付けたり、それを和風の折り紙に印刷したりして様々な工夫を凝らし、準備に励みました。また先輩方のアドバイスも参考に、大量の名刺、壁に貼るとホワイトボードになるシート、日本のお菓子なども用意しました。私たちが担当したのは国連総会の第三委員会を模した会議で、議題はThe Protection of Journalists and Humanitarian Workers in

Conflict Zones です。会議前のブリーフィングでも私たちの議題に関するお話があり、「人道支援」が今国連にとって最優先の課題なのだと肌で感じました。会議一日目は、聞いていた通りスピーチばかりが続き、なかなか当てられなかった私たちはせっかく用意した政策を議場に紹介することができませんでした。また、一番悔しかったのは自分たちが政策を用意していた論点にあまり時間が割かれなかったことです。国際大会では Moderated Caucus（着席討議：モデ、MC）、Unmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ、UC）ともに目的を明確にしたうえで行われるため、他の参加者がリサーチしてきていないトピックを提案すると投票で却下されてしまいます。結局一日目は一度だけモデで発言をし、その時にメモを回して「一緒に Working Paper（作業文書：WP）作ろう」と言ってくれたペアのところに行ったものの、グループが大きすぎたため他の4カ国ほどと集まって小さなグループでWPを提出しました。会議二日目は、フロントがとにかくコンバインをして Draft Resolution（成果文書案：DR）数を抑えて欲しいと繰り返していました。時間もなく、正直政策の説明をしなくてもなんでも OK といった感じで拍子抜けしてしまう場面もありました。一方、良い意味で予想を裏切られることもたくさんありました。まずはアメリカ人のスピーチの上手さに驚きました。内容はともかく、あれだけ自信に溢れたスピーチができれば自然と人は集まります。自分たちを振り返ると始終不安そうな顔をしていた気がします。横柄になってはいけませんが、自信があるように振る舞うのは大切だと学びました。また私たちのことを気かけ、助けてくれる他の大使の優しさには本当に感動しました。英語に関しては、国連開発計画の中満さんが国際社会で活躍するには「ニュアンス、ディテールまで伝えられる英語力が必要」とおっしゃっ

ていたのが印象的でした。会議では、英語を話すことよりも聞き取ることに苦しみました。議論が白熱してくると、皆が早口になり「もう一回言ってほしい」といえる雰囲気ではなくなるので、困惑した顔で立っていることしかできず、今でもその場面を思い返すほど悔しかったです。ただ、自分の発言は理解してもらえたので、この派遣での体験は良くも悪くもこれからの英語学習へのモチベーションになりそうです。二日間で何度、日本人と日本語でならやりやすいのと思ったかは数知れませんが、そう感じたことこそが一番の収穫なのかもしれません。実際に地球的な課題を解決するための話し合いが行われているのは、多様な人種、価値観を持った人が集まる場です。そんなところで活躍したいと思うなら、なんでも日本式でやろうとするより、違いを受け止められる寛容で柔軟な自分に成長するほうが早いと思いました。全日本大会は間違いなくどんな高校模擬国連の大会よりもハイレベルで学ぶことも多いですが、国際大会に参加してようやく、冒頭で触れた平和構築のための努力というものが少し理解できました。

「ここにいない高校生のことを考えてください。」閉会式で聞いたこの言葉に、はっとさせられました。思っていたのと違った、観光をする時間もないくらい忙しかった…自分が感じていた不満に恥ずかしくなり、たくさんの人に支えられ、ニューヨークで模擬国連ができる私たちは本当に恵まれていると気付きました。あの煌びやかな世界にいと、地球のどこかにご飯も食べられず苦しんでいる人がいるということをすっかり忘れてしまいそうになります。でも、本来はその人たちを守るための会議であり、国連なのではないでしょうか。そして各訪問先で国連の抱える課題について考える機会をいただきましたが、誰のため、何のための国連かということ

を国連に関わる人一人ひとりが追求し続ければ、いつか官僚的すぎるなどという批判はなくなるような気がします。これは一国を背負った大使であることを忘れない、という模擬国連に臨む際の姿勢とも繋がると思います。これらを踏まえ、私は今回の経験を「自分にとって」良いものになった、というだけで終わらせたくありません。特にこれから全日本大会、国際大会に挑戦する後輩に体験を伝え、私がたくさんの先輩にお世話になったように、できることがあればなんでもさせていただきたいです。

最後に、引率の理事・研究の方々をはじめグローバル・クラスルーム日本委員会、ユネスコ・アジア文化センターの方々、国連開発計画の中満様、国連日本政府代表部、クウェート政府代表部、協賛、協力の企業の方々、家族、学校の先生方や友人、先輩と後輩、派遣OB・OGの先輩方、全日本大会で知り合った仲間、そして世界一のペア、上田と、尊敬する大好きな10期派遣団のみんな、その他、陰に陽にこの派遣を支援してくださった全ての皆さまに心から感謝申し上げます。今感じている感謝、決意をずっと忘れないで、これからまた新たなことに挑戦していきたいと思っています。ありがとうございました。



高原 奈穂

神戸女学院高学部2年

GCI High School Model UN Conference 2016に参加して

まず初めに、この報告書では、この派遣全体が私にとっていかに重要なものであり、有意義なものであったのかを伝えきれないであろうことに言及しておきたいと思います。なぜなら、高校2年生といういろいろな夢・現実と同時に向き合う時期に、貴重で素晴らしいこの経験からうける衝撃はあまりにも大きく、具体的にどのようなこの経験を生かせばいいのか、はっきりとしたイメージがつかないからです。成長した自分にこの強烈な経験をまたたどってさらなる深い学びを得て欲しい、と思うので、この場をお借りして未来の自分に向けて書き残したいことを織り込みながら報告書とさせていただきたいと思います。

世界大会での最大の目標は賞を取ることでした。結論から申し上げますと、念願の賞には手が届きませんでした。

少し会議の具体的な話に移ります。受賞を目指すに当たって、ペアの二人で熟考した上で、二つ具体的な目標を立てていました。一つは、方法を問わずとにかく目立つことでした。これは渡米前に緻密な打ち合わせの元で完璧に用意ができていたので、現地で実行するだけです。もう一つ、これが受賞できるかできないかの決定打となるのですが、グループのリーダー的存在となり、たくさんの発言の機会を得ることでした。

前者は、成功だったと思っています。思いついたことをすべて実行しました。会議開始前には、印象的な名刺を配り日本のお土産を渡しました。会議中には、できるだけクウェートというあまり聞きなれない国名を印象づけるためクウェートの国旗をラミネートし肌身離さず持ち

歩き、服装も大多数の大使のスーツ着用が予測される中、ドレスコードはもちろん守りつつではありますが、「明るめの色で印象的に！」ということで、二人とも水色の服を着用しました。また、国連ショップで購入したかわいいクマのぬいぐるみに、クウェートの国旗をもたせて常に抱きかかえておくことも印象付けることに効果的でした。視覚的に訴えかけるという幼稚な方法に思えますが、ネイティブではない私たちが賞を目指すにあたって真剣に考えた時それが必要であることは確信していたので議場で目立てたことには満足しています。今後の派遣生の方々も、思いついたことは全部やればよいと思います。一生に一度の機会なので、思い残すことがあってはなりません。

さて、一方、後者に関しては大失敗に終わってしまいました。さらに、ペアを組んで以来、初めての、グループに所属しない、つまり、成果文書をだせる立場にない、という厳しい状況が長時間続くというものでした。始めに議題に対する主張が近そうな国々にメモを回して自分たちのグループを形成しようと思っていたのですが、実際に集まってきた国は少なく、求心力と言語力のなさ故に、その国々をも離散させてしまいました。二日間通して行われた会議で、初日は、グループを作れないまま何をすればいいのか困惑し時間が過ぎていきました。初日終盤に所属できるグループを見つけ、夜は徹底的に立て直し方を考えました。しかし、2日目の会議が始まるとすぐ、グループがどこにも存在しておらず集まっていないという異常事態を認識しました。メンバーを集めようと必死になって呼びかけましたが、遅刻していた他のメンバー国もあったようで、グループとして集まることができずでした。そのせいで、後々、議長が私たちの、決議案の提出を認めてくれず、他のグループとの統合を迫られました。この議長からの指示を把握できていなかった私たちは統

合に猛反発し、その挙句、他の大使から、私たちの条文案を地面に捨てられ、「気に入らないのなら出て行け」といわれました。あまりにも衝撃的で思考が一時停止しました。この瞬間、クウェートの条文・主張を成果文書に這ってでも残さなければならない、という当たり前のことに、はっと気付きました。決議案を執筆している人のとなりにいて、早く写してくれるように頼み込みました。しかし、時、すでに遅し。時間切れで、3ヶ月かけて準備した、私たちの一切の条文が、決議案に残ることはありませんでした。「やってしまった」と絶望しました。悔しさを通り越し、悲しさがこみ上げてきました。時間は無情にも過ぎていき、大会は幕を閉じました。喪失感を感じながらそれを見ていました。

このように、我々ペア史上最悪な苦境が続く会議の中で、傲慢にも、最後の最後まで受賞を諦めずできることをすべて、会議終盤では奇跡が起こることを漠然と「願う」ことであつたとしても、やりきったことは、誇らしいことであると思っています。二人でならなんとか状況をひっくり返せると思い続けていましたし、世界の議場でも状況把握を共有するだけでお互いにやるべきことに向けて、もがけていたということを実際に嬉しく思っています。私たちがしさを失わなかったこと、それは、私たちの模擬国連に対する信条が揺るぎないものであつたことを意味していると思います。それだけ打ち込める模擬国連という競技との出会い、そして、環境に恵まれたことを感謝しています。

さて、自戒も込めて、次期派遣団の皆さんに先輩風でも吹かせてみようと思います。

一つ目、自分の成功体験から徹底的にたくさんものを学んでください。成功の原因を分析し、そして、その要因の前提を分析してください。想定外の状況に耐えられるように、自分のことをよく理解してください。私は、自分の日本語をしゃべることに対する自信に半無自覚的

であったため、英語での会議では「自分らしい」と思っていたいわゆる「派手な大使」になることができませんでした。

二つ目、楽しんでください。困ったとき・停滞を感じる時はいつでも、笑顔になりましょう。“Smile because it happened.” そのときできることを自分のやりたいように。

最後になりましたが、これまで、活動を支えてくださったたくさんの方々、本当にありがとうございました。高校模擬国連としては大きな一区切りを迎えました。終わりは始まりです。素敵な始まりとして、この経験を振り返れるよう、身を引き締めて今後も歩んでいきます。



藤井 あや

神戸女学院高等学部3年

私のやりたいことはなんだろう。日本で送る高校生活の間、この疑問がずっと頭から離れませんでした。特に模擬国連国際大会への派遣が決まってからはこの思いは募るばかりでした。

「あなたたちは決して模擬国連のプロになるわけではない。」と、理事・研究の方が国際大会派遣中に何度もおっしゃっていました。では、模擬国連の意義とは、一体何なのでしょう。私が模擬国連に対して抱いていた疑問の中にその答は隠れていたのではないかと思います。

米国中心の実際の外交とかけ離れた外交を行うことに意義はあるのか。

国益を達成するにあたって、グループを作るとは重要なのか。

何のために Unmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ）においてグループを形成するのか。

何のためにアンモデにおいて、DR のスポンサー国になろうとするのか。

何のために文言一つにも必死になるのか。

何に対しての賞なのか。

大使とは何なのか。

そもそも、模擬国連会議とは何なのか

これらについて考え、各個人がその答を見出すところこそが高校模擬国連の真髄なのではないかと、今回の国際大会への派遣を通じて気づかされました。しかし同時に今思うと、このようなことは会議中にはちらりとも考えてはいけなかったのです。会議中は、(少なくとも賞をとるためには) ためらいや恥じらいを捨て、貪欲にグループのリーダーを務め、Open-minded で人を集めるべきなのです。恥ずかしながら、会議中に私は、これがクウェートの国益達成の何につながるのだろうと考えてばかりいた気がしています。賞を貪欲に取りに行こうとする大使が多かった私たちの議場において、何としてでも賞を手に入れようとする姿

勢にかけていたことが賞を得ることができなかつた最大の敗因だったのでしょう。

また実際に会議に臨むと、「事前に聞いていたのと全然違う！」と強く思いました。自分なりに想定していたのは全然違ったのです。方向性を変えるべきということは頭では理解していました。状況に柔軟に対応すべきというのもわかっていました。しかし、それでも実際にはそのように行動することができませんでした。おそらく、私は自分の会議準備にがんじがらめになっていたのだろうと思います。もちろん最低限のリサーチが必要であるのは間違いありません。しかし、模擬国連において求められているのは、決してリサーチ量の多さなどではなく、「与えられた環境に順応し、その条件下でのベストパフォーマンスを行う」ことだと強く感じました。

会議が終わった後は、ひたすら言い訳ばかりでした。「議論が偏っていた」

「2分間のスピーチの機会がまわってこず、Moderated Caucus（着席討議：モデ）においても十分当たらなかった。運が悪かった。」

「ネイティブに伍してリーダーシップを発揮していくには、2年ばかりの海外滞在経験では、英語力が圧倒的にかなわなかった」

でも、本当のことを言うと、これらは全くただの言い訳に過ぎないものでした。改めて自分をしっかりと見つめなおすと、ためらいを捨て「与えられた環境に順応し、その条件下でのベストパフォーマンスを行う」という行動がいつの間にかできなくなっていたことに気がつきました。英語力だって十分ではないけれどくらいついていくことはできました。ものすごいスピードの討論に参戦するのは最低限にして、全体をファシリテートすることに努めるなどできることはいっぱいあったはずなのに、それができていなかったわけです。自分が大使としてやりたいことを見失ってはいけなかったし、それを環境のせいにして言い訳してはいけなかったのです。

会議を楽しめましたかと問われると返答しづらいところがあります。しかし、私は今回の派遣を通して、自分の伸ばすべき長所、自分が気をつけるべき短所を見つめなおすことができたと思います。これから先自分がやりたいことは何かについて考えがクリアになったように感じますし、際大会派遣事業は間違いなく私に成長のきっかけを与えてくれました。悔しさはたくさん残りましたが、本当に出ることができてよかったと思っています。

終わりに

2014年12月の練習会議に始まり、1年半。長いようで短かったですが、私は模擬国連に関わり充実した時間を過ごしてきました。そして、そこには多くの人の支えがありました。

全日本大会および高校生の際大会派遣を可能にくださった、協賛の企業の皆様・ACCUの皆様。時には他愛ない話で盛り上がり、時には会議についての思いを共有し、共に6日間を過ごした、国際大会10期派遣団の派遣団員のみんな・研究・理事の皆様・各引率の先生方。これまでの練習会議の運営をはじめ、様々な形で大会に向けてのアドバイスを与えてくださり、エールを送ってくださった、模擬国連の先輩方・同輩達・先生方。そして、最も近いところで私を支えてくれた妹と両親。

私の模擬国連生活に関わってくださったすべての方々との出会いに感謝して報告を終わらせていただきます。



鈴木 雅子

渋谷教育学園渋谷高等学校 3年

「袖振り合うも多生の縁」と言いますがまさに今回、日本代表団に加えて頂いた中で、私が最も強く感じ、大切にしたいと思ったことでもあります。

学校の模擬国連部に所属していたので、今までも他校との会議に参加して、様々の大きなテーマを考える機会、それを他の人にぶつけることができる機会を持つことができました。もしこの人にあのタイミングで会っていなかったら。あの時に声をかけてもらっていなかったら。どれ一つ欠けても、今ここでこの報告書を書いている私はいなかったと思います。

選抜に通った瞬間は、すべてが自分の努力の成果で、それを神様が認めてくれた！そう思いましたが、今改めて考えて見ると、色んな人との出会いでインスパイアされた自分、そういう環境を作ってくれた人たちのサポート、兼部している剣道部のマネジメントをフォローしてくれた後輩たち、そういう人たちがいなければ、今の私はいなかったのだと思い至ります。

特に思い出深いのが全日本大会での選考課題です。何を聞かれているのか分からない。なぜこんな質問をされているのか分からない。そんな中でたった4題の課題を突き詰めてただひたすらに考える。どちらの方向に、どうやって進めばいいか分からない。道なき道をかむしゃらにとにかく必死に突き進む。そんな思いで始まりました。煮詰まってくると、思い浮かぶのは「どうして私は模擬国連活動をやっているのだろう？」という、単純極まりない問いでした。獣医志望の私に必要だったのか。そもそもどうして始めてしまったのかといった疑問がずっと解消されないままでした。

その結論を出したいという意味でも、今まで支えてくださった人々に対して誠実でありたい

という意味でも、今回のNY行きは私にとって非常に意味の深いものだったのです。

国際大会の会議内容は日本国内の大会のものとは全く違います。日本国内ではいかに議論を細部までしっかりと詰められるか、現実性があるかなど事前知識のリサーチや準備に基づく議論が多いのに対して、国際大会では大使がいかに話術やスピーチ、交渉などで技術的に人をまとめられるかなどが多く、議論もその場で考えて出したアイデアを積極的に取り込んでいきます。もちろん賞などの評価について言えば、もそれぞれでの会議に基づいた基準で判断がなされるのだと思います。しかし、参加してプレゼンスを出すという点においては、人柄的に人をまとめられるか、つまりその大使が信頼のおける人物かどうかということが国内・国外共通して重要だと思います。常に他人に対して誠実であること、他人との関係を大切にすることは基本的なことのように見えて実はものすごく気を遣うことであるし、エネルギーのいることです。それぞれやり方は色々でしょうが、私は模擬国連のそういう所を評価してくれる雰囲気や交渉、コミュニケーションは結局「人」対「人」なんだと、当たり前なこと気づかせてくれたこのシステムに魅力を感じ、感謝しています。

実は、国際大会初日はかなり落ち込んでいました。今まで参加してきた国内会議との違い、特に自分の英語のせいでニュアンスを伝え切れないのではないかと今更ながら驚き、臆してしまいました。言えることや言いたいことがたくさんあるのに、相手に伝わり切らないだろうという不安や諦めから発言をする勇気をなくしました。1日目が終わった後はつまらなかったという感想のみがただフワフワと残りました。部屋に戻ってペアや先生、運営の大学生の方々や派遣団のみんななどと話すうちに、自分がいかに最初に決めた目的を見失っていたかということに気づかされ、あがくことをやめてしまった自分が情けなく、悔しい思い

をしました。そこで初めて2日目から冷静に議場を見つめることができました。ここでも自分ひとりでは立ち直れなかつただろうことに思い至ります。

改めて会議に向き合ってみると、まとめてひとくくりに「英語のできる大使たち」と思っていた人たちが多種多様な個人で、当たり前ながらそれぞれがそれぞれの個人的動機も含めた微妙な思惑を抱いて参加しているらしいことが見えてきました。相手を一人ひとり個性ある人間として大切に考え、そう考えると、それを踏まえて話を進める余裕が出来始めて、相手にも認めてもらえたような気がします。そこからやっと私の話を聞いてくれる人たちが出てきたのです。まず、話すのでなく、話を聞いてもらう状態に持っていく。普通に聞いてもらえる国内大会とは、そもそもスタートから違っていただけでした。

この国際大会で見出した「私が模擬国連をやる意義」は、「縁」に尽きます。自分とは全く異なった背景や考え方を持つ国内外の同年代の大使と、同じ時間、場所、参加する意志を共有し、それに向かって協力することが出来るのは、確率的に考えても奇跡に近いことです。会議が終わった後もずっとその経験を共有することが出来るのは本当に幸せなことだと感じます。

また、この縁という概念は、模擬国連の活動のみに止まるものではないと信じています。どんな活動であっても自分一人では出来ることには限界があります。模擬国連では多くの大使が自分の国を代表してそれぞれの国特有の外交を通してより良い世界のために協力します。

馬においても、一頭の馬を走らせるのには獣医のみならず、装蹄師や調教師、騎手や馬主など多くの人々がそれぞれの特有の技術を生かして協力し合います。多くの人と協力して何か大きなことを成し遂げる際に、協力できる機会やそのメンバーとの縁の一つ一つを大切にしてい

くことは大事なことではないかとおもうのです。

最後に、私が模擬国連という活動に携わることが出来た縁、そしてそれに関連して、ここまで支えて来て下さった方々と出会えた縁に、そして何より、自分と社会とのかかわりを見つめ直すこの最高の機会にかかわれた「縁」に感謝しています。ありがとうございました。



二木 恵

渋谷教育学園渋谷高等学校 3年

「NYで“世界大会”に参加した！」というのは確かに分かり易いビッグイベントなのですが、私にとってこのNYでの大会は、高1で始めた練習会議への参加から、全日校内選考、全日書類選考、全日本大会と続いた模擬国連という活動の「集大成」という位置づけではありませんでした。むしろ、最初に学校内で参加した小さな練習会議からここまでが、一つの長い長いプロセスであったように感じられます。国際大会は、その「最後の発表会」とでも言うべきものだったのでしょうか。

この長い過程としての模擬国連は、大小問わず、様々かつ貴重な機会を与えてくれた場でした。国連の機能や国際社会の諸問題に関する知識が増えました。リサーチが上手くなり、相手の意見を尊重しつつ自分の主張ができるようになり、人前に立つことへの抵抗が減りました。他人と議論をしながら、自分がどのような考え方をするのか、何を大事にするのかに気づきました。大学教授、国連職員、国の大使、先生など普段お会いできない方々とお話してきました。敬語のメールが素早く打てるようになりました。全国から来た、本当に優秀で、気さくで、魅力的な“モギコッカー”達に出会いました。とても幸運だと思っており、感謝しています。

ただ、これらの模擬国連の“付加価値”はときに、その素晴らしさに伴う単純な辛さと戦うのには不十分だったというのも事実です。高1の夏頃までが「模擬国連って楽しい！」のピークだった自覚はあったのに、決意を固める前に参加してしまった校内選考。プレッシャーとプライドと責任から後には引けず、次から次へと来る課題を多くの方の力を借りながら“乗り越え”、気がつけば第10期派遣団の一員となりました。

そんな中、私は周りに応援され後輩に“尊敬”されつつも、模擬国連という“競技”自体の魅力が語れませんでした。そして密かに、そのことに対する一抹の不安というか、いや、もはや「語れなきゃダメなの？」という反抗的な不満を抱いていました。模擬国連は競技なのか一競技であるべきなのか。賞が存在する時点で、模擬国連の会議は“勝ち負け”の場所になります。自分にとっても周りにとっても、賞を取ったら「賞を取れた」し、取らなかったら「取れなかった」ことになります。しかし、模擬国連は自分の本来の性格や考え方がかなり直接的に活動での行動に影響するという点で特殊であり、またその理想がゲーム的でないべきであるため、ゲームのように評価するのが難しいのです。リーダーシップの取り合いであるべきではなかったはず。では模擬国連はなぜ楽しいのか、なぜ賞を目指すのか、なぜ頑張るのか、私は理由を持たぬまま、会議準備という正解のない問題に答えようとペアと必死に議論をしていました。

作業に追われ、じっくりと悩む時間はありませんでした。でも、今思えば、終点とわかっていたNYで、「次に進まなきゃそのために勝たなきゃ」という何かに迫られているような感覚、あるいは会議に向ける熱意の少し欠けたまま、私は議場に足を踏み入れたのです。

会議の結果は正直、散々でした。

私達は、“持続可能な都市化と社会経済的統合”について、「国際協力の流動化」を中心とした政策を用意していました。アメリカ人は具体的な政策を作らないだろうと踏んでいたため、それに合わせ、敢えてある程度曖昧な政策にしました。また、ペアも私も、初っ端からグループ形成を担うより、“二番手のブレインとして働き最終的に乗っ取る”作戦が得意だったので、“尖った”案を持たないことにしたというのもあります(秘密兵器としての具体案も作りました)。

会議の実質参加国数が29と少なかったので、

序盤からスピーチの機会は回ってきました。しかし、印象に残る話はできず、皆が私達の話聞いていない空気が伝わってきました。その後のモデでも挽回はできず。アンモデでは、全日の時の様に「ここが似てるね」と強調しても「まあね、でも私はこれをやりたいから」と返され、その場でアイデアを考えていく「工場の煙突にフィルターを付ければ大気汚染を解消できるんじゃない？他のアイデアある？」のノリについて行けず、最後は「賞を取るのはきっと私達ね」と笑う大使を少し遠くから眺めているだけのようなものでした。発言しても失敗する自分しか想像できなくなった私は相槌マシンとして議場にいました。折角NYまで来させてもらって、期待されている行動ができないことを申し訳なく感じました。

それでも私は、来て良かったな、とひとり思っていたのです。「時間がなかったから、議題解説書を読む以外準備してないんだよね」。堂々と語るグループの中心メンバーの前で自分の主張を思うように出来ない私には、自分の至らなさを痛感することしかできませんでした。彼女にあって、都市化についてずっと詳しいはずの私になに何かは何なのか。それを考えるのは、意外にも全く惨めではなく、むしろ刺激的なことでした。会議終了直後、議長の話聞きながら、感じました。「もう一度、この会議に参加したかったな。」一番初め気軽に参加した練習会議後に抱いたのと同じ感想です。なぜ初期の頃模擬国連が純粋に、メリット抜きに楽しかったのかを思い出しました。

「模擬国連は自分の本来の性格や考え方がかなり直接的に活動での行動に影響する」と書きました。私にとっての模擬国連の面白さとは、会議という特殊な場所で特定のミッションを与えられた中、自分はどうのように目標を達成するのか、自分にはどのような能力、長所・短所がある（ない）のかを突きつけられること、自分は

どう成長すべきか考えさせられることなのだと思います。模擬国連に慣れ、"コツ"を掴んだ気になり、要領良く仕事を"こなす"ことを考え始めた時が、その楽しさが分からなくなっていった時でした。これが出来るようになりたい、ではなく、グループ内での発言力を得つつ無難に会議を終わらせたい、賞を取るというタスクの達成に成功したいというモチベーションで、偶々何となく上手くいってしまっていた私。進行や求められる力の異なるアメリカの Model UN で、完全に挫折をし、でもそれが面白いと思えました。

例えば、今回アメリカ人について実感したことの一つは、彼ら彼女らが驚くほど“話す”のが上手であることです。自信を持って、流暢に、堂々と話します。レトリックの使い方が非常に効果的で、知らないことを聞かれても咄嗟に言葉を並べて返します。また、中身がなくてもとりあえず話すということに罪悪感も不安も持っていないように思われました。それは100%良いことではありませんが、スキルとしても凄いと、感銘を受けました。

もちろん、賞やよく分からないなにかを追ってひたすらに頑張った時間にも意味があり、また楽しいと感じる瞬間も多々ありました。模擬国連がなかったら出来るようにはなっていなかったことを挙げ始めれば、きりがありません。本気でひとつのことに取り組めたという経験は、確実に私の今後の糧になると思います。します！

「模擬国連」、長かった—そう感じられる理由には、「代表に選ばれたからには」という一種の強制力が常にあったから、というのがありますが、それは、意志が弱く何かから逃げて出そうとしてしまう私がこの素晴らしい経験をできた理由でもあります。何より、この一生ものの経験を作り上げてくださった数多くの方々に、感謝してもしきれません。本当に、ありがとうございました。



児玉 大河

桐蔭学園中等教育学校 6年

この派遣事業をもって私の高校模擬国連生活が終了しました。ルールも知らず、はじめて会議に出た中学三年の夏から模擬国連という活動に取り組み続けた結果、良くも悪くも今日の自分が出来上がっていると感じています。実は、高校模擬国連という活動に関わった期間、会議への参加回数は派遣団の中では最も多く、誰よりも多くの経験を積み多くのことを学ぶことができた、という自負があります。その中には苦しいこと、悲しいこと、時には嬉しいこともありましたが、自分らしく笑顔で乗り切ることができ、すべて自分の財産になっていると今ならはっきり言うことができます。

私はこの場で皆さんに伝えたいと思っていることが多すぎるため、この短い文章の中では、今回代表したクウェートの政策や、実際に会議中に起こった出来事、また模擬国連そのものについて詳しく記述するつもりはありません。ここに記述されていないことについては（もちろん記述された内容でも）、どんな形でも構わないので私に聞いていただければ、すべてを誰にでも伝えるつもり、というよりもむしろ伝えたいくらいです。ぜひ聞きに来てください。そこで、私がこの文章で記述することは「国際大会を通して、何を達成することができたのか」に絞ります。その中でも大きく分けて3つのことについて、みなさんにお伝えしたいと思います。

1つ目は、度胸です。度胸を得られたとは言っても、もちろん以前と比べて、であるのですが、これから世界で日本人が活躍していくために、とても大切な要素であると考えています。国際大会では、議場はもちろんすべて英語でなければ伝わりません。私はこの派遣事業によって初めて日本という国を出ました。そのため、すべ

てが初めての経験であり、渡米前は不安でしかたありませんでした。帰国生でも、英語が得意なわけでもなんでもない私が、日常生活はまだしも、ましてや議場でクウェート大使として自国益、国際益の達成のために交渉などできようか、と悩んでいた時期もありました。しかし、会議の前には「とにかく積極的にチャレンジしてみないことには、何も始まらない、逃げたら何も得られない。」と自分に言い聞かせ、良い意味で開き直ることができていました。その心持ちの結果か、外交担当として、多くの国の大使に話しかけ、そして話した大使と良い関係を築けたり、実際に協力を取り付けたりすることができました。もちろん、日本でこの経験を活かして、彼らを信じ、尊敬の念を持ち、笑顔で話したことで、彼らからの信頼も得られたと確信しています。これはすべて、経験を活かしつつも、今までのように物怖じせず、正面から壁に突っ込んだ結果です。どんなに技術を持っている人も、行動を起こす勇気がなければ、何もできません。大きな壁に正面から突っ込んで壊そうとしたこの度胸は、会議からこうして得ることができました。

2つ目は、最後まで諦めない気持ちです。今回の議場では、私たちに運は味方してくれなかったし、会議の流れもよいものではありませんでした。他国の大使に会議の流れを握られたまま時間が過ぎていく…正直そのようなことは、初めての経験でした。こんな絶望的な状況の中、私はとにかく議場を動き回り、たくさんの国、グループの大使と意見を交換し続けました。外交役として少しでも何か貢献できることがあれば、と必死でした。動いていれば、何かが起きるのではないかと心の奥底では思っていました。自分のできることを最大限やり切り続けました。これはある意味、昨年度の先輩方がおっしゃっていた「逆境を楽しむ」ことに通じてい

たのかもしれませんが。そしてこの気持ちは会議中だけでなく、会議準備でも得ることができました。それは英語についてです。全日本大会で最優秀賞をいただくまでは、英語からただただ逃げていました。しかし、国際大会を楽しみたい、そしてパートナーにも迷惑をかけたくない、そしてもちろん、これを機に英語ができるようになりたい、という思いでそこから渡米までの間、常にポッドキャストなどで英語のニュースを聞き続け、帰国生の友達、パートナー、英語の先生も頼って英会話の特別特訓をお願いし、また単語帳をひたすら覚えるなど、直前まで、できる限り、できないなりにあがいたという自信だけはあります。今までここまでの絶望的な状況に陥って、あきらめずに戦い続けて這い上がろうとした経験は、記憶の限りありませんでした。最後まで諦めなかったからこそ、得ることができた経験も数多くあると確かに感じています。

3つ目は、最高のパートナーと最高の仲間たちです。パートナーの田邊は、模擬国連を始めたころからのパートナーであり、個人的にはライバルでもあります。だからこそ彼に対しては、たびたび嫉妬をするくらい、尊敬してやまないです。一時期ペアを解散した時期もありましたが、部活では部長、副部長として、また全日本大会、国際大会と共に苦難を乗り越えた私にとって、大きすぎる存在でした。それだけ長くペアを組んでいるとお互い不満が募ってうまくいかない時期もあり、しかしそのたびに腹を割って話すことで、その壁を越えることができ、今こうして国際大会を戦い切ったからこそ、彼が最高のパートナーだ、と行うことができている。先輩方が残してくださった大きな目標である「世界一の賞」には届きませんでした、「世界一のペア」になることができたこと、私は本気で心の底からそう思っています。

そして同じ10期派遣団として国際大会を乗り

切った仲間たち、きっと一生残るであろうこのつながりも得ることができたとも思っています。勝手ながら私はこの10期派遣団に愛着がわいてしまっています。それぞれのペア、また一人一人がとても个性的でみんなが異なった、魅力的な能力を持っていることを肌で感じました。そんな彼らと話していると、いろんな側面が見えてきて、話が止まりません。聞きたいことがいまだに山積みです。とにかくにも1人1人ともっともっと話をしたい、関係を深めていきたいと思うと同時に、はじめに述べた通り一生モノの関係ができると本気で思っています。人間という生き物は、1人で生きることができないといつも考えています。だからこそ一つ一つの出会いを大切に、すべてに感謝して、模擬国連であれば最高のパートナー、最高の仲間たちを皆さんにもつくってほしいと感じると同時に、そして私自身もそういった仲間を大切にしようと思切に思っています。

ここまで私が国際大会を通して、得ることができたものを3つ長々と書かせていただきました。私はこれらのことを、モギコッカーとしてではないかもしれませんが、これからの長い人生を生き残るため、世界で活躍するために活かしていきます。この文章を読んでもくださった皆さんには、模擬国連を通じて同じこと、それ以上のことを得てほしいです。

さて、この文章の最後に、私の好きな言葉を書いて終わろうと思います。それは“Stay hungry, Stay foolish”という言葉です。この言葉、あまりにも有名すぎるのですが、現在私の座右の銘といったところですか。失敗を恐れることなく、チャレンジしてこそ道は開ける。挑戦無き者に成長も、成功もない。このメッセージも受け取って、何かを感じ取ってもらえれば、と強く願っています。

ここまでレポートを書いてきて、このような経験をさせていただいた私は、とても幸せであり、それはすべて周りのサポートあってのことであつたと感じています。こんな私が国際大会を通して、さらに成長できたのは、今まで私を支えてくださった家族、部員、先生方、グローバルクラスルーム日本委員会の皆さま、派遣事業にご協力くださった皆さま、そしてパートナー、10期派遣団のみんなのおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



田邊 雄斗

桐蔭学園中等教育学校 6年

これから模擬国連を経験する高校生への想いと今までご支援してくださった方々への感謝を、模擬国連国際大会での経験を通じて述べさせていただきます。

高校模擬国連は、私にとって、そしておそらく多くの人にとって、人生において最も刺激的な「チャンス」です。今回の派遣事業で、私は悔しい思いをしましたが、同時に最高に楽しむことができました。それが今後の自分に与えるであろう影響の大きさをすでに実感し始めています。

私が初めて模擬国連を経験したのは、中3の秋でした。はじめはただ単に楽しそうだからと入った模擬国連部でしたが、その日々は予想をはるかに超えて楽しく、また非常に苦しく、そして自分を豊かにしてくれました。ことあるごとにあらわになる自分の弱点、強くなれない自分へのもどかしさ、凄すぎる人達との出会い、そして少しの達成感を繰り返しながら、私は模擬国連に育てられていることを実感してきました。よって、今回の国際大会は私にとって今までの自分の成長を全て発揮したい「集大成」でした。

今回私たちは、議場は国連食糧農業機関、「2050年までの世界的な食糧増産」についてクウェート大使として参加しました。食糧問題に関する事柄ならば基本何でも（バイオ燃料、気候変動、都市化、生物多様性、GMO、食肉消費、水資源など）話し合うことができたため、会議の方向性が非常につかみづらく、いかに会議の方向性を定めるか、そこが勝負でした。

1st Sessionでは、さまざまなトピックについてのモデレートコーカス（数カ国の大使の公式

発言）で時間が過ぎていく中、だんだんと会議の方向性が定まっていき、GMO（遺伝子組み換え作物）について賛成か、反対かという会議の流れができてきました。その後のUnmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ、UC）でグループができ始めたのですが、それらのグループはことごとくGMOに対しての賛否で分かれており、他にいくつもある重要な問題には触れていませんでした。クウェートの政策はGMOというよりも他の項目に重点を置いており、そもそもGMOの問題だけについて話し合っても国際益には繋がらないはずだと私たちは考えていましたが、結局私たちは何もできず、流れに飲まれ、議場に何の痕跡も残せないまま1stを終えました。

今まで自分の培ってきたものが発揮できず、私は非常に追い込まれていました。正直、この時間帯が一番辛かったです。しかしそんな中で頭に浮かんだのは、先輩方の「逆境を楽しめ」という言葉でした。昼休みの間に戦略を立て直した私たちは、2nd Sessionでの挽回を狙いました。

2nd Sessionでは会議の流れを変えようと、公式発言では必死に、GMOに固執しすぎないこと、国際益を考えることの重要性や新たな政策を訴えました。スピーチのあとは、何人もの大使が「いいスピーチだったよ」「お前やるな」などと言ってくれた結果、頼れる大使たちと、GMOばかりに特化しない、多面的に食糧増産を考えるグループを形成することに成功しました。おそらく議場で最も組織がしっかりし、全メンバーの意見を取り入れることができたグループだったと思います。私は自信を取り戻し、いつものように動けるようになっていました。

3rd、4th Sessionでは、コンバイン（他のグループとの意見統合）に終始しました。コンバインの結果、私たちは議場で最大のグループに

なったのですが、他のグループの大使に主導権を持って行かれてしまいました。彼はグループの中心の数カ国だけで作業をし、他の大勢の大使はやる事がなくなってしまっていたため、グループの輪は乱れ、組織としての体をなさなくなってしまっていました。そこで私は周りの大使を集めて仕事を分担し、さらなるコンバインに備え他のグループとの交渉を開始しました。しかしそれも実ることなく、結局グループみんなで何かを成し遂げることはできませんでした。結果として私たちの決議案は可決されたものの、悔いの残る会議行動になってしまいました。

私はNYにやるべきことを幾つか置いてきてしまいましたが、そこから得たものは確実にそれより大きいです。ここに2つ、集大成としての国際大会で得たこれからの自分への課題を、みなさんと共有したいと思います。

一つ、「信頼と自信を感染させる」。これは、1stで心が折れそうになった私が、なぜ2ndで復活することができたかについての話です（自分もまだまだですが）。ある程度の経験と技術、自信を持っていたとしても、精神的に倒れてしまう時は必ずやって来ると思います。そんな時、自分だけがグループの主導権を握っていたら、その組織やそのメンバーはどうなってしまうか。周りに流され、再度立ち上がることもできずに、壊れていってしまうかもしれない。…それではダメだ。自分が倒れても、周りの人がなんとかしてくれる、自分を信頼して助けてくれる環境を作れることこそが、今の自分が目指すべきリーダーシップだと思います。主導権を他の人に渡さないことに固執するのではなく、信頼関係を作ることに固執すれば、強固な組織が出来るはず。これは模擬国連にとどまらず、何かにぶち当たった時、自分を必要としてくれる仲間がいるのか、そこが前に進むための一つの糸口だと思います。信頼と自信は感染します。

信頼できる仲間を作る、そして自分達に自信を持つ。そのような組織は求心力を持ち、そういう関係づくりができる人は「最強」だと思います。

二つ、「出会いを大切にすること」。特にこの模擬国連という世界は底が見えないほど深いです。今回帯同してくださったGCの大学生の方々やともに戦った派遣生のみんな、それぞれがそれぞれの魅力を持っていて、一生関係を絶やしたくないと思える最高の人たちです。もちろん国際大会や全日だけではなく、模擬国連と一緒にやれる人たちがどれだけ自分に影響を与えてくれるのかと思うと、いてもたってもいられなくなるくらいに、模擬国連の世界はスゴイです。そしてそのつながりこそが、模擬国連の一番楽しい要素の一つだと思います。もちろん模擬国連以外でも、たくさんの人とたくさん話して、たくさんものを共有して、協力したものの勝ちだと、そう思います。

今回の派遣事業を通して得た課題は、必ず次の自分に生かそうと思います。そして、改めて感じた模擬国連の面白さを、ぜひ、できるだけ多くの高校生の皆さんに味わっていただきたいと思いました。最後になりますが、今回の派遣事業を支援してくださった全ての皆様、私たち派遣生をサポートしてくださったグローバル・クラスルーム日本委員会の皆様に、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



灰田 悠希

灘高等学校 2年

私はこの度、幸運にも高校模擬国連国際大会に参加する機会をいただくことができました。そして、今回の国際大会を通して非常に濃密な経験ができたと感じています。この報告書では、私が国際大会で体験したことと、そこから何を学んだのかを報告致します。

まずNYでは、派遣を通して異なる文化の存在を強く感じました。日本にずっと住んでいると、アメリカ人、ましてやイスラム教徒と会う機会はほとんどありません。それに対してNYでは当然ほとんどがアメリカ人で、大会には中東から来たイスラム教徒も多くいました。NYにはレディーファーストの文化がしっかりと根付いていて、エレベーターで男性が女性に先に降りるよう促す姿は至る所で見かけることができました。また、大会ではイスラム教徒のための祈祷室がきちんと設置されており、流石は国際大会だと感服しました。これらのように自分が触れたことない異文化に直面する中で、それまで普通だと思っていた日本という「世界」は、世界全体から見るとほんの限られたコミュニティだったのだと認識させられました。

私は相方の牧野とともに、「紛争後地域における教育再建」という議題のユネスコの会議に参加しました。この議題は教育という大きな分野の中では比較的マイナーですが、規模が大きく非常にシビアな問題です。私たちが参加した議場は、大会のいくつかある議場の中で最大規模であり、合計200人近くもの大使が出席しました。

会議で他の人と話をした時初めに思ったことは、みんなフレンドリーで、自分の英語でもなんとか会話することができるということでした。まず、会議が始まる前に議長に「おにぎりせんべい」を渡しに行くと、笑顔で喜んでくれました。そのお陰か、多くの国の中で最初にスピーチす

ることができたため、非常に良いスタートを切ることができたと思います。また、周りにいた他の大使とも意外とうまく話すことができました。NYに行く前、自分の英語が果たして現地で通じるのか、という強い不安に取り憑かれていた私にとって、このことは大きな自信となりました。

今回の国際大会における私の最大の目標は、「積極的に話すこと」でした。会議を通して多くの人と話すことができたという点で、この目標はある程度達成することができたと思います。しかし一方で、特に議論においては英語の早さについていけない場面が多く、全日本大会のように「議論を形作る」ことはほとんどできませんでした。言いたいことはなんとか伝わりましたが、問題は英語のリスニングです。それまでネイティブスピーカー同士が議論する早さの英語をほとんど聞いたことがなく、会議の1日目はその早さに圧倒されました。2日目になると少し慣れたため、1日目に比べると議論に参加できるようになりましたが、ネイティブには到底及びません。普段から英語を聞き、耳を慣らせることの重要性を強く認識しました。

会議を通して、私たちは目立った成果を残すことはできませんでした。しかし、会議で積極的に他の大使に話しかけた甲斐があり、閉会式の後に「Good job!」と話しかけてくれた人もいて、アメリカやカタールに住んでいる友人もできました。残念ながらAwardをいただくことはできませんでしたが、日本では決して出会うことのない多くの人たちと話をすることができて、国際大会は私にとって忘れられない経験になりました。

私は現在、将来どのような分野に進むかを決めていません。しかし、今後は「世界の広さ」と「自分が普段生きている世界の狭さ」を強く意識しつつ、様々な価値観を理解して真に国際的な視野を

身につけるために、これまでは興味が薄かった宗教などについても深く勉強していきたいと考えています。また、今後は高校模擬国連国際大会に参加した者として、この経験を最大限生かし、来年以降の世代に繋いで行けるよう努力していきます。

最後になりましたが、今回の派遣を通してお世話になった方々への感謝を述べて報告書を締めくくらせていただきます。神保さんをはじめとする大学生の方々、ACCUの高松様、引率の先生方、裏で私たち派遣団を支えてくださった多くの方々、そして派遣団の皆さん、本当にありがとうございました。



牧野 越叢

灘高等学校 2年

まずは、先頃5月11日から16日にかけて、大変多くの皆様の御協力、御支持の下、無事に国際大会派遣を終えられましたこと、御礼申し上げます。ありがとうございました。今は取り敢えず10期としてこの事業を「受け継ぐ」ということを無事果たすことができたという安堵で一杯です。

会議全般の感想としましては、矢張り如何ともしがたい言語の壁の存在を再確認させられ、不本意な所も多く残るものとはなりました。しかし一方で逆説的ではありますが、全日本大会で自分たちがやってきたことを偏にそのまま再現することができたならば、世界にも十分通用するだけのポテンシャルがあるのであり、日本はそういう意味で相当恵まれた国なのだという感慨を強く抱きました。

例えば国際大会では、先ず大使が十に迫る数の比較的小規模のグループに分かれて意見を集約するのですが、最終文書提出前に各々の議論を議場全体に対し共有することによって喧々諤々し意見の調整、改善を図る、これを推し進めるリーダーシップが一つ、評価されるポイントに挙げられます。自身が出席したUNESCOの議場においては、この「議場全体への共有」の重要性を認識していた大使が「大半を占めていたものの（と言いますのは自身が各グループに赴いてその事を説いて回った時に、激しく頷いてくれる人が非常に多かった、しかし言われるまで気づかないという風であった）」、実際に議場前方の演説台に上がってその事を呼びかけるという行動を起こした大使は「ついで居なかった」という印象的な経験をしました。変化を起こさせることこそできなかったものの、メタな視点

を持って議場をコントロールする視点、これは案外一般論として日本人に自覚はないのかもしれませんが、世界的にはかなり進んだところをいっているのではないかと思います。この「メタな視点」の希少性は同様に共同文章の内容の議論の内にも垣間見ることができます。今、自分たちがものすごく小さな所を深堀りするばかりで、建設的な議論をできていないということへの自覚。これに気づいていたのも、尤も自身が把握していた範囲に置いてではありますが、日本人である自分しかいなかったのではないかと考えています。と同時に、議論の緻密さ、準備の巧みさに着いても日本派遣団は間違いなく世界トップクラスだと今だから確信できます。

そしてこれらのスキルは、そのまま全日を通して培われていること、そして全日の選考で求められていることなのです。

以上の諸々の事、無論、言語力の問題もあり自身が全て正しいことを言っているとは限らないし、全て彼ら彼女らの議論をフォロー出来たとは露ほども思っておりません。しかし、それでも強調させてもらいたいものがあるとするならば、それは「もっと自信を持っていいとうこと。気持ちで気圧されてしまって、縮こまって見えてしまうのは勿体ない。胸を張って、取り敢えず喋り続けること。」もう一度やり直すことができたら、数週間前の自分にこれを伝えたいと、痛切に思われます。

とは言え、言語力の壁も無視することはできません。これを因に、全プロシージャーを縦横に楽しめなかったのも一方では事実です。

議場全体がスタンディングオベで拍手を送ったスピーチ、たぶん半分も聞き取れなかったのではないかと思います。ただ訳がわからずふやけ

た顔で周りに従う自分がいました。議長のジョークがあまり理解できなかったのもそうです。先に書いた、自分が「気付いている」にもかかわらず変化をもたらす事が出来なかった場面もそうです。言語に自信があれば、自分がその演説台に上がる一人目になればいいのですから。

矢張り模擬国連に限らず世界の中心で戦う上で、最後は個人同士の信用関係が物を言います。その際に、第二言語者の外来語学習の通説に反すことを申すようですが、中途半端な取って付けたような英語ではなくて完璧な英語というのはどうしても迂回できないのではないかと。やはり国際人として生きると一度決めた人ならば徹底してその自分を生きる為にも妥協は許されないのだなあと思わされました。

とはいえ、来年度に向けて日本派遣団がより議場で闊達に動けるように、インフォメーションを提供する観察者、オブザーバーとしての役割に関しては十分に果たすことができたのではないかと自負しています。自分は会議の中盤からこの役割に半ば徹することにしました。このことと言いたかったのは、大どんでん返しのようなのですが、結局は「いかなるスタンス」で会議に望んでもいいのだ、ということです。英語が十分でない自分は自分なりに、そのディスアドバンテージを補っても余りある楽しみ方は出来ました。オフには、タイムズスクエア、グラウンドゼロやセントラルパークといった名勝。運が良ければオプションで、美味しい料亭や観劇もすることができます。そういうオフの部分も含めて、人其々、派遣期間の色々な楽しみ方があっていい、派遣を終えて、今はこう思います。最後に、この機会を提供下さいました関係者各位にもう一度感謝申し上げて、この小稿を締めさせていただきます。本当にありがとうございました。

■ 支援者・支援団体一覧

本大会の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます（敬称略）。

【後援】

外務省 文部科学省 公益財団法人日本国際連合協会 国際連合広報センター

【協賛】

株式会社内田洋行	一般財団法人 凸版印刷三幸会
株式会社エヌエフ回路設計ブロック	トヨタ自動車株式会社
学校法人 河合塾	株式会社ナガセ
キッコーマン株式会社	株式会社日能研
株式会社公文教育研究会	株式会社ニチレイ
TOEFL Junior® (GC&T)	海外トップ大進学塾 Route H
株式会社講談社	(ベネッセコーポレーション)
株式会社ジェイティービー	株式会社みずほ銀行
学校法人 駿河台学園	株式会社三井住友銀行
損害保険ジャパン日本興亜株式会社	三菱商事株式会社
ちきゅうくらぶ	株式会社三菱東京 UFJ 銀行
学校法人 高宮学園 代々木ゼミナール	

(五十音順)

【協力】

株式会社日本経済新聞社
日本航空株式会社
株式会社読売新聞グループ本社
株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
理想科学工業株式会社

(五十音順)

■ ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) からのメッセージ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、グローバル・クラスルーム日本委員会とともに高校模擬国連事業を共催し、日本代表団派遣支援事業を推進しております。「次世代の国際人 / グローバルな人材を育成する」という趣旨にご賛同いただき、ご協賛・ご協力をいただいた企業様・団体様に改めて深く御礼申し上げます。

昨年の第9回全日本高校模擬国連大会で優秀な成績を収め、第10期の派遣団に選出された皆さんの国際大会における堂々とした英語での主張、交渉能力は立派なものでした。

クウェート国大使として会議に参加する準備の大変さは想像に難くありませんし、英語が大きな課題だったという派遣生も多くいたことでしょう。そのような状況で、皆さんが堂々と会議に臨み、他国の大使に政策を訴えかける姿が見られたこと、そしてその結果、麻布高等学校ペアが優秀賞を受賞したことは、私どもにとっても大きな喜びです。

2016年は日本の国連加盟60周年を記念する年であり、11月に予定している全日本大会とあわせて本派遣事業は「日本の国連加盟60周年記念事業」にも認定されています。国際大会における皆さんの活躍、ものごとに真摯に取り組む姿には多くの方が期待を寄せており、各種メディアでの受賞記事や、ACCUのFacebookページに掲載した派遣の報告を伝える記事は多くの方の注目を集めました。そしてこの報告書を読んだ高校生もまた「自分も模擬国連がやってみたい」「この先輩のようになりたい」と刺激を受けることでしょう。何人かの派遣報告にもありましたが、ぜひこの体験を後輩に伝えていってください。

今回の国際大会で得た経験や努力が、皆さんの将来のキャリア創造に役立ち、次世代のグローバル・リーダーに成るための一助になるなら、ACCUとしてもこれ以上の喜びはありません。

最後になりますが、国際大会派遣にご尽力いただいた関係各位の皆様には心より御礼申し上げます。今後ますます派遣事業が発展して行きますよう、ACCUとしても精一杯努めてまいります。今後ともご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU : Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) について

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) はユネスコ (UNESCO、国際連合教育科学文化機関) から「アジア太平洋地域での文化の相互交流を促進する中核的センター」の設置を打診されたことを契機に、1971年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、日本を拠点にアジア太平洋地区諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行なっています。2011年11月からは「公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター」として、これまで以上に関係機関と連携して地域の現状と社会の要望に即した事業を展開しています。

■ グローバル・クラスルーム日本委員会（2016年6月現在）

（敬称略、順不同）

【アドバイザー・ボード】

明石 康
（元国連事務次長 / 公益財団法人国際文化会館理事長）

【評議会】

星野 俊也（議長）
（日本模擬国連 OB / 大阪大学副学長 /
元国連日本政府代表部公使参事官）

中満 泉
（日本模擬国連 OG / 国連事務次長補及び国連開発
計画総裁補兼危機対応局局长）

紀谷 昌彦
（日本模擬国連 OB / 駐南スーダン大使）

柿岡 俊一
（埼玉県立浦和西高等学校教諭）

竹林 和彦
（早稲田実業学校教諭）

米山 宏
（公文学園 SGH 担当教諭）

高松 彩乃
（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
模擬国連推進部）

齋藤 優香子
（慶應義塾大学法学部 3年 /
2016年度理事長）

神保 真宏
（東京大学経済学部 3年 /
2016年度研究主任）

馬欠場 直人
（2013年度国際大会派遣生 /
慶應義塾大学経済学部 3年）

安田 侑加
（2014年度国際大会派遣生 /
聖心女子大学文学部 2年）

【理事会】

齋藤 優香子（理事長）
（慶應義塾大学法学部 3年）

神保 真宏（研究主任）
（東京大学経済学部 3年）

宇野 真一郎
（慶應義塾大学法学部 2年）

南 篤
（東京大学教養学部 2年）

高橋 佑太
（東京大学教養学部 2年）

大内 朋哉
（東京大学法学部 4年）

馬欠場 直人（広報局局长）
（慶應義塾大学経済学部 3年）

西田 裕信（広報局副局長）
（東京大学工学部 3年）

中村 詩音
（国際基督教大学教養学部 2年）

安田 侑加
（聖心女子大学文学部 2年）

明石 美優
（聖心女子大学文学部 1年）

岡野 源
（東京大学教養学部 1年）

■ おわりに

数多くの支援協力団体のおかげで、ACCU（ユネスコアジア文化センター）と共に実施している高校生模擬国連国際大会の第10回日本代表団派遣事業も、無事終了しました。

大学生並びに ACCU のご協力に心より感謝します。来年は果たして実施できるのかどうか、大学生たちは全日本大会を無事遂行してくれるのか、最近では模擬国連大会そのものの実施に関する懸念があります。我々評議員はあくまでご意見番でしかなく、準備から実施まで全てが ACCU と大学生の肩にかかっています。ですから、こうして第10回を無事終えられたことを何よりも嬉しく感じています。

今年も、高校生たちが安心して会議に参加できたのは、大学生たちのサポートのおかげだと言っても過言ではありません。また、企業回りや渡航の手続きを始め、細かな気配りで学生たちを支えて下さった ACCU にも心から感謝しています。

さて、今年の国際大会はどうだったでしょうか。例年よりも日程が1日短くなったこともあり、自由な時間をほとんどとれなかったことは、見方を変えれば、会議に臨むにあたり、準備にも余裕がなかったと言えるかもしれません。また、各会議場での議事進行は、議長によって様々であり、フォーマルディベートの多い議場もあれば、アンモデをあまりとらない議場もありました。今回全体的に感じたのは、議長レベルでの申し合わせや、コミュニケーションがきちんととれていたのか、また会議運営全体の打ち合わせは十分できていたのかということがあります。果たして国際大会の質そのものは低下していなかったのか再度みんなでするべきかと思えます。

日本代表団は、それぞれの議場で、一生懸命頑張っていました。中でも、麻布高校チームは常にグループの中心的役割を担っており、グループ内のリーダー的な存在でした。臨機応変な対応や、説得力のある説明など、随所に目を引くところがあったと思います。それはまさしく全日本大会そのものでした。言葉は英語に変わっても、会議のスタンスは変わらないことを証明してくれました。心から受賞を讃えたいと思います。

代表団のみなさんが高校時代にこの国際会議に参加できたことは、間違いなく生涯の貴重な宝です。全員が大きく成長して帰国したことでしょう。そして、今後の模擬国連の発展や、後輩への指導など、課された責任も大きいと思います。しかし、それだけの価値ある代表であると確信しています。今回、団長としてたいしたこともできず、申し訳なく感じっていますが、今回国際大会に引率できたことを光栄に思います。

来年に向けて検討すべき課題は、国際大会での日程の見直しと、全米大会への参加そのものの意義を改めて問うことでしょう。もちろん、今日まで続いてきた模擬国 OBOG たちの輪の広がりやを止めてはいけないことだけは肝に銘じつつ、今後の検討を進めて行きたいと感じています。

グローバル・クラスルーム日本委員会 評議員
第10回日本代表団派遣事業 団長 柿岡 俊一

■ 関連リンク

グローバル・クラスルーム日本委員会 / Japan Committee for Global Classrooms	http://www.jcgc.accu.or.jp
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	http://www.accu.or.jp
米国国連協会 / United Nations Association of the United States of America	http://www.unausa.org/
全国英語教育研究団体連合会 / The National Federation of the Prefectural english Teacher's Organizations	http://www.zen-ei-ren.com/
外務省 いっしょに国連 / "Together for the UN" Outreach Campaign	http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/together-un/
【お問い合わせ】 グローバル・クラスルーム日本委員会	gc@jmun.org



編集・発行 グローバル・クラスルーム日本委員会
 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行年月日：平成 28 年 6 月